



老人雜話

乾



リ得5  
2052  
/



門リ伊5  
種 205-2  
1-2



老人雜話序



續書反古と成る事或るに代は室温古の如新  
 され若くは私々くは古也宜く亦る但又倚松松  
 生る永保八年己丑少生れ寛文己甲辰事多下  
 言はは十既百歳ありし始り取照りしは共  
 後世他州の如事しを醫行と以京師に所  
 津り身代の長壽なりと云  
 後尾上自物し御成代端なり也  
 され老人の雜話と伊友定然とてのら也 一冊  
 有て書る事多し是れ老人に對話す、宛て書居  
 乃友あり古人と遊慕するのみあり定然書八旬余

子村の和泉  
権五郎の孫子孫

老人の孫婿坂口法眼立齋是浅狭守今年八十  
ハヤリと壽と云く終るゝありす也 家父是書  
一古人の言ふを賞すとのみ

正徳三年春書す

武湯 滄洲 頌



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

### 老人雜話

老人の以村出齋より得た字具醫と筆入此水  
右肥後仕及の歳是死も仕永保八年先原度殿  
元乃年の生書又元六月は守行年百五

一 又山北侍舎と経冊切と稱す 南原寺傳長老の  
時経冊切人書河の龍山寺の書題とす 侍と作  
之は後絶くあり 舎れ式に云岳山長老乃の西堂  
舎に字乾齋と作は板板評と云ふ中河の由也  
の人各題一の書と一の生に也 物と云ふ書は  
之の題に定る紙題評と云題定る後々の題  
成上座の題と 押す物引合の紙と廣き経冊



第玄名所

- 一 又攝家正統後不世に清光の家乃人又まより
- 一 下等々家の人ありて嗣事創り親王家
- 一 人代嗣しむる子法より守りて今並出及一條
- 一 友親王家の人とて嗣しむる非之より私とて
- 一 攝家の人とて少將を歷降り創り
- 一 立寄丹町人お持より家口筆の新地撰細川
- 一 幽齋おそれれ時價白浪十段也と付す一
- 一 乃寄より今も鳥丸に家あり
- 一 宗祇に今も一百年以前の人ありて會
- 一 此給仕する者一若に成産といふも老人に成産

一 今予より連奔の式定りて惣とありきる

一 宗祇よりありておの百白みりて中稀あり

一 唯之捨の法にありしと

昌休 昌北 昌記 昌孫 昌親  
 依也 昌休 其仍 昌北 玄的

- 一 賢之自毫の云依り紀蓮花を院の什物あり
- 一 成定之家は法せり年連也師玄的也
- 一 今ハ加賀の家ありて定家の写本今ハ自
- 一 毫の毫カよあり 末二三枚とありて之の自毫
- 一 の本は大き字の形とて様とありて是を
- 一 法世少抄と書之と法とありて若し法を
- 一 為りて跋と書是と見ても書之とありて定家

増廣 早通  
大徳院 増廣院  
是之於 由安也

乃時之掃ありと見え居今時住こよ人の樂  
君之くまの跡とて初持すりまき笑居るも其の定家  
乃時近き君之くまの跡の不在中見そくまの定家  
系とて定家此布ふあり也之くまの年い年のい定家  
定家く平の老人度と見えりしに君之くまの法法  
字の痕なり今時之腐物とて似しとての比に取す  
定家の年久く加増とて八條殿と見えりしを  
一 得長壽院今之三十三宮堂と見えりしを  
法遠と見えりしを若名と見えりしを  
院は後白河院此所送答と見えりしを  
す今此三十三宮堂之増登松蘇抄と見えりしを

一 大佛の古号は方廣寺あり  
二條殿く小池は新に今の定家の小池の町あり  
所所は應仁の法燒失し老人知女く時小池  
の池跡と見えりし小池は泉涌わく四條院今此日  
汗の町あり西流小池の迹に今定家の町あり  
大杉小倉ありまの跡と見えりし二條殿は侍小の家哉  
作しと見えりし二條の所所は十塔乃名と見えりし  
此小池の所所也信長の時なり二條殿と見えりし報孝半  
今く名あり 治持と見えりし小池は新に最きを  
表と見えりし小池は反橋と見えりし鳥丸通  
東の橋と見えりし定家の東側の町と見えりし町を

乃後小長塚をうけ多門も向ふは所成乾  
志く信長位一於て陽光院一就す陽光院の  
後陽光院殿は法又二在宮山一法郎位友六  
一山崎のふ陽光院市辻時老人も五六  
町中の役もせむ代宗多長安院も  
故より也供奉す織部御寮目隔子と  
忌す老人一因より十二歳の時より  
信長は此所と陽光院殿一進一又あのころ  
上京村の時妙定寺鐘と妙定寺の室町  
某師町よる小池の法所の隣あり  
老人印又也村は善院主朝一院ははるく

故及この世嗣とく法中の醫師の事あり人々  
敬慕す故道三は時也再をく療治院と  
にく陽光寺も多し一玄朝望り療治を志す  
方一招待り一村一多物と云の事と故未年  
法持也と云る事履とく杖と何方と  
人々むらり事と云  
一  
公方又陽光信長を謀り一京とく一焼  
亡也一老人九歳の時より一実小弟也二  
信すと云る事一山崎の事一  
秀頼も歳の時余内も伏見へ行くと云二  
三六入洛して申立書上殿の履也

また余の口には連ひし法成の室町通を南へ  
下す見物群集を相大岩立髪と云ふなり  
むすむすの産袖の羽織も各代背縫い襟の摺  
筋あり底ありの投げ巾着志せき馬のたかま  
斗後立の半所斗同く又者も人半階ふ  
大仏堂まで秀形は右大関樂と云移り  
秀形は浅きあり浅き形に入すも人形斗  
樂先小指の諸大名大房のるの宗二り下流す  
す是の藝樂なり城又立終く後中年一  
りしものことあり

一 大関肥前の名古屋相りし時長松被後と

云能き丈法見物ふ余は時り能かはずきあり  
てはるかにし度くあり

一 大岩の松中にと法ありし時長松被立余  
能きあり長松被後す時大関長柄の刃  
常一虎の皮は太巾着被後と云  
能きあり見物す能果けはきし後と云  
わらわらちまたはるかにありは後と云  
通りありしは

一 或時大岩馬りし馬丸通しと云内りし  
利左衛門の下女は五人ありの言れはけおと見物  
せり大岩の上は身は白喉介内裏と云



能く守りて後見物ふこと

一 大岡村半々之能有村後樂も亦これなり  
同く此の如く相解して看らるるありや

一 大岡全盛之時何事とくのみありてとて  
とあるを式法に寄れ合言るに付らぬ事とて  
上座より座せり存反たはるありて是等中にも友古と名にを附感し  
多し辨にしく退き座半一哥と唱ふ実の塔  
友古と名にを附感し

一 蒲生には元の士あり依て本兼復の是のち  
信も仕又大岩の仕氏郷すくれ事とて  
姑々勢州相取もて捨式万石と所解す

在り合はば百石捨万石代に大岩の付て十歳  
斗と兼復のは元一ヶ國と解しと大岩なり  
信も仕とされとて当兼復の子ハ即郎連  
大岩の村の者にて知外武旨名を蒲  
生に合はばありしと百万石全に依りて伏見  
ふとに大岩のはるに付て退きと村氏  
芳茂とひく力と持て退きとてありとて  
蒲生は元兼復のはるなりと時日解す  
氏父の又碩為とてて性信病の人と季  
生時信官のふ哥の日種は蒲生辰海とて  
とて下座と名や依とて一人の事也

一 赤松礼と云は善光院殿と殺す<sup>殺</sup>討の事なり  
 始山名と赤松とお無く善光院殿にお仕す  
 或村産おと枯る松より浅山名具といえ  
 あの赤松浅切捨すさと云方<sup>方</sup>前<sup>前</sup>と云  
 赤松と云もそのにませり<sup>利</sup>者ありと云  
 山名と云と云<sup>山名</sup>南と云也是も<sup>山名</sup>申あり  
 秋と善光院殿と殺す此赤松と云心之胃  
 律師別依り多縁あり浦祐と云は子の首  
 尾具と云く是つ<sup>人</sup>の物ゆと云ふ  
 善光の三人元とて隠れり<sup>武勇</sup>者あり  
 有信長の是之を<sup>人</sup>揃ふ一徹<sup>の</sup>名<sup>は</sup>今<sup>も</sup>此<sup>所</sup>に<sup>在</sup>り也

一 善く<sup>氏家</sup>ト全<sup>是</sup>任<sup>是</sup>事<sup>を</sup> 善く<sup>伊賀</sup>伴<sup>が</sup>善<sup>く</sup>  
 新<sup>辰</sup>山城<sup>を</sup>た<sup>ら</sup>し<sup>乃</sup>油<sup>高</sup>く<sup>の</sup>子<sup>あり</sup>又<sup>妻</sup>代  
 率<sup>ひ</sup>く<sup>善</sup>光<sup>院</sup>より<sup>一</sup>城<sup>を</sup>中<sup>生</sup>り<sup>家</sup>不  
 去<sup>波</sup>入<sup>仕</sup>一<sup>つ</sup>云<sup>波</sup>未<sup>も</sup>成<sup>西</sup>も<sup>礼</sup>  
 にも<sup>向</sup>一<sup>つ</sup>多<sup>う</sup>一<sup>つ</sup>成<sup>は</sup>善<sup>光</sup>院<sup>乃</sup>國<sup>主</sup>と<sup>成</sup>討<sup>村</sup>  
 乃<sup>落</sup>書<sup>ふ</sup>  
 ときを<sup>れ</sup>ど<sup>の</sup>一<sup>つ</sup>と<sup>り</sup>せ<sup>ぬ</sup>四<sup>の</sup>は<sup>な</sup>ま  
 一<sup>つ</sup>の<sup>破</sup>れ<sup>と</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>事</sup>なり<sup>か</sup>  
 とい<sup>く</sup>一<sup>つ</sup>信<sup>長</sup>乃<sup>掃</sup>氣<sup>なり</sup>一<sup>つ</sup>山<sup>城</sup>も<sup>つ</sup>子<sup>あり</sup>善<sup>光</sup>  
 新<sup>と</sup>善<sup>光</sup>又<sup>一</sup>山<sup>根</sup>も<sup>つ</sup>善<sup>光</sup>人<sup>代</sup>殺<sup>す</sup>一<sup>つ</sup>又<sup>の</sup>結  
 山<sup>出</sup>一<sup>つ</sup>成<sup>す</sup>と<sup>お</sup>一<sup>つ</sup>又<sup>の</sup>合<sup>戦</sup>山<sup>城</sup>成<sup>す</sup>なり

子と對峙し付死に事新子新身あり  
 極く病人の此時信長は病臥自の夫より  
 澱川右近の関の城長橋龜山城之志を以  
 ち左衛門右衛門と攻めしむる後志長世人柴田  
 破るに成りしむる左衛門に降参すま七歳不和必  
 下合戦の時福島の志長氏を人々解に  
 の城を東照宮の方向より以城主内通  
 下心算させしむる澱川は城に入る時澱川の  
 下りありし事しむる行りし時俄に汐千く事  
 成りし事しむる病中右衛門と一宗と澱川  
 の病中者多し入らずと信長に云ひし事しむる

一 東照宮御ふ天城く皆殺す澱川に扱あり  
 下味方に屈し右衛門又謀りんと約て命を成  
 助られし事しむる中々事しむる事しむる  
 最後と後殺後より死信長の時事しむる  
 改及人の子に名柴田秀吉澱川に死あり左近  
 武勇の事及此名ありて度々関の城に及んた  
 澱川は関の城に及んた名ありて事しむる  
 あり事しむる事しむるの事あり  
 一 本多の孫隠れりし事しむる武勇の若強攻む言の士  
 あり本多の孫隠れりし事しむる澱川生氏に屬  
 時氏に具成りし事しむる三孫の孫後め成りし事しむる

物々として引奪く言くと信田原清氏は是と云  
 孤に及び武村之孫禁所に之を我に討て居る  
 一々之孫居我取先丁得せんと之を討て居  
 物居馬つと 東照宮麾下の武士通里合々  
 有代官多くと答大知音ありと陸を奉斗  
 折くと三浦宅に池入攻め者居氏に之復す計  
 者ともよけ多ん云いと何處人として二人も小  
 中もせよと云遂に余中合守此於筑前也  
 統猿下りて人あり今上麾下に子孫あり  
 二條乃城を関ヶ原陣と云く城を造せり  
 一 隈城是の代若く不振陣と云く天井より約と

一 嘉永元年の事人笑種に云中より武中殿陣の  
 人信長急成村の約争く下りて身交り中  
 ありむと云く

一 元和三年に此近江の湖に星出く我の  
 教百丈と云く新に云く人信長星といふ  
 一 慈眼院殿の由村春の局と云く女河津前坊  
 云く信長の乳起たり吾下洛初に在来の春り  
 局乃号不考と云く

一 研者内親如くして性根根く人あり春の局と云  
 にく信長信長信長信長信長信長信長信長  
 七付と云り信長信長と云く信長信長と云く

と云ふことより、内田村に集る稲長一徹は  
長より明知たるに、同く日向守りて一石  
成より一徹也、信長より所より日向守り  
至丹波へ赴き、一石加増し、二万石とす  
長尾輝信、信玄とて、人懐かしく、紙一ツ  
少服を一徳とて、山城へ赴き、朝倉の件に  
行事ありと也

信長は丹波の所へ、婿入の村、唐柳のゆく、  
陰形とて、大小藩村とて、一石あり、紙一ツ、  
山城へ赴き、朝倉の件に、日向守り、  
肝と懐し、日向守り、山城へ赴き、  
日向守り、山城へ赴き、日向守り、

あるとて、子使波返、一回、合、家具の大を、  
用、一石とて、信長宿に、一石あり、  
誓、山城の對面、又、隆之、七、三、武、法、用  
此時、山城、嘆、日向守り、日向守り、  
生、心、我、子、使、波、返、一、回、合、家具、の、大、を、  
用、一、石、と、て、信、長、宿、に、一、石、あ、り、

一  
信長の土市橋下、総書、放、相、者、あり、若、使、の  
武、田、乃、家、あり、信、長、小、使、者、あり、未、常、山、く  
去、く、唐、守、の、相、あり、下、総、書、寢、身、と、て、行、志、り  
け、が、知、り、た、り、是、と、い、ふ、事、は、収、め、り、と、て  
使者の前より、御、一、石、と、て、是、成、使、と、い、ひ、け、り

手紙の陰の成きう向由使者是の  
餅とてい程喰ふと云ふ信長は笑て山  
高齋陳の時右若り根枝備中右成言齋使上  
者備中甚難に支度難三好新為  
舟にて銀成黒田如水小借利根百枝と信  
備中均給と新右衛門と同通と如水は  
禮成銀百枚外に拾枝成持事利是の  
心多如水  
討顔と云ふと成手てたす人の  
く礼多鯛と三枚と相り今之曾成及  
下志て河成おせよと云ふ人へ成ふ是は河成  
至て三好成取出礼と云ふ神も借ふ

今力の心成とて再三志のて取り之甚  
感しと云ふけふ

右京原原成の事小宮本土地の成成是  
東照官例と相ります右河成事  
少成右成の云安成事なりと云ふ成是は汝と中山  
道成先成小成付と云ふなりと云ふ東照言同成  
小成と云ふ成と云ふ成と云ふ成と云ふ成  
成ありと云ふ成ありと云ふ成ありと云ふ成あり  
父あり東照言と云ふ成ありと云ふ成ありと云ふ成あり  
右成右成成と云ふ成と云ふ成と云ふ成と云ふ成  
行と云ふ成成と云ふ成と云ふ成と云ふ成と云ふ成

河季旅より不如言行人として珍中進物として  
と遠富田在進と保くをさすふ右客位より  
東照宮へ是罪あり河對面河の後富田は進  
東照宮のいもよく先りたすは罪及可重  
石川伯耆守河此旅に片紙付ありに或紙に  
このいもよく此人又大ふまは知ありて中興  
物見え又小田原中より礼をさす  
志津之獄の時楊井た去り名は武平七年  
河守も楊井より早く病死を有る人あり  
右圖のふ種同様より才大和太納言と云大和  
純伴和泉三ノ國對以志津之獄の合戦中

川放死の時身形は牧守より左首尾より  
右客位より諸大名の陣中より身より種違と  
のふありとも大納言殿より早く秀治の身成  
表より守り大和太納言といふ  
長息言著同永原より原より退く馬武名以て  
返せと云即立物より細くみまをせすすふ  
首領御主人をに良兵衛人奉りし引  
のけ亦不首領夫七あり免之目と云ん事  
是礼寺引或者は必返せや云厚の  
そとより以言著一度に切有者打つ  
一 國より力の時薩摩の將軍を庫 今の薩摩  
は頼朝 計

一 けふと本年多中務井伊多頼是と中務は後  
逃之人と云ふ初に逃る武者波のりす中務は  
有るす〜と云ふ返せと云ふ 多波魚と云ふ初は  
取て返す 波地の者なり〜と云ふ多波り多波り  
阿多中務は馬あり〜と云ふ多波り  
小回原跡候へ後と云ふ大寄法將攻むと云ふ舎  
付に八人の要地候〜と云ふ大將波魚と云ふ  
かたもぬ也 多波り多波り 所存と書すは人  
の角 多波り 今ハたぬのり波り  
〜と云ふ者十に八九人 左岡田波魚は  
波り下城多波り 取事 多波り 多波り地

蒲生忠三〜と云ふ〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
おとけも  
一 右関心〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
生れは多〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
御遠は多〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
丹羽多波り〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
十五万石と云ふ〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
飛騨と云ふ〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
八十方石波魚と云ふ〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
一 山城〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ  
女〜と云ふ忠三は年々若ありと云ふ



上は右関白向吾威光散のちを何くんとす  
右関左者く者に之より松茸出上りて止  
させよすむひるをとす

右関白殿様之時座中より刀伐去り人々右客  
より門を依り人皆疑ふ依り右客の氏宗  
出る所すゆり同い後居りありと出りて  
鞠のく人伐捕り信長の狩に時折り宗  
信長威し始り微録とす

志保の獄の軍は右客一代の務事解き軍は  
東照宮の世の務事あり右客の時後早よ  
て平伏之旨玄蕃中川胤元属伐攻をゆり候と

すむとすゆりゆり途中にく百姓より  
粥とたらしむ 東照宮の畿門をと一差伊路  
に成り名義ゆり信進御守り付居り  
ありゆりゆりともありとありゆりゆり  
淀川ゆりゆりの井作を初斗あり 濃川松上り  
軍を大秘苑山性あり松上り 東照宮の軍  
を大既りゆりゆり急に及船中の精兵を討宗  
左近邊よりを城中に川城ありゆり事能  
逃走をせ

一 東照宮右関白馬込村よりゆり後関白と  
そのゆり室の六ヶ所あり 常陸と信竹ゆり

一 上野の佐野清の介富徳乃也等右衛門  
東照太子御東より討つて後佐野清は  
改定より討つて修理する等の者より上野守西  
修理より討つて之より佐野清は房長と云  
いふ同事あり

一 大岡 左衛門右代官東より討つて後甲兵は佐  
義不二所警遠はよふと遠は以言繁に  
病死は之後を以て民は後種強心より  
甲兵は東の警東一の要地なり  
右衛門右代官東より討つて後南生は源を合  
討つて合討つたより西地より討つて上野の

路通つて若長苑水領事軍攻めて上野佐  
野一報を傳へ少く働を以て為あり  
一 澁河屯十八万石中村屯の蒲上式部六  
多石宛十人より外多し人数は約六  
万石云々若長苑水領事軍攻めて人教と率と  
互に少く戦ふ中少くも人教と率と  
右衛門の人教と率と戦ふ中少くも人教と率と  
右衛門の少くも戦ふ中少くも人教と率と  
人代清する中多し以て攻め流大石根を物  
すくありて右衛門は他界の明年より伏人等  
既事起り果右衛門の敵と戦ふを伐とせん



上方より河をさるる石河博友一々日本一味八  
東照太子及徳大寺大少輔と流るる中河等  
良村より戸上仰り洋定阿る上方は善代  
各官出るる畧るる法を答るる不能上方元之  
内々福徳左衛門守直出回右智達言の如く  
秀形神立ぬる先良神いさ人といふ法約  
此時法園の左馬も中不能福徳を出度  
已るるの如く善代元一人善  
之出右等 崎井伴多於を回るる先  
之人と評さるるありて後法約法を妻子後と  
成るるに高き花小一旦降るるといふ人云

東照太子より上方に流得可き上方に流り  
東照太子乃後法園に七月の事紀く九月小  
瀬にも是流るる原る合戦をいふ神法約  
市利を後小傳り申納云敏波阜より改修寺  
比由より改軍に

一 明和信長を執行時を右宮小殿と傳り法次尼  
坊の寺よりいふ法辨いさ上の人善衣白子  
此よりありて善代今小寺伝るる

一 右宮小諸大石出仕すれど多るる善代  
或象戯或其式礼拝一存るる善代ありて  
右宮小諸大石よりいふ善代是する善代といふ

山の南を流す

一 本國を以て攻めたりし時 徳川院等

一 吉野に天下に勝つる事ありし時 徳川院等

一 肥後にて幕府の攻められたる時 徳川院等

一 徳川院等 南条玄蕃を討つて 徳川院等

一 それより幕府の如く 徳川院等

一 守るべき城を山城と稱す 徳川院等

一 徳川院等 山城を討つ

一 徳川院等 山城を討つ

一 徳川院等 山城を討つ

一 徳川院等 山城を討つ

本國と京と江戸と之所 山城

一 徳川院等の城を築く 山城

徳川院等の城を築く

山城を築く

山城を築く

山城を築く

一 山城を築く

山城を築く

山城を築く

山城を築く

一 山城を築く



多々御縁よりとまんとしつゝ遂に治式お違ふに  
多々之御縁よりとまんとしつゝ遂に治式お違ふに

右宮下中果達より里或村右筆一破破の破  
成志より右宮指より大内字と地よりと云波部  
さるり如針 書局よりと云又高麗の軍中  
元奉よりと云下さるりつゝ云云 紙に云々  
右 甚しやるるを 軍中より 治 是より行つ  
ハナカ

右宮下中果達より里或村右筆一破破の破  
成志より右宮指より大内字と地よりと云波部  
さるり如針 書局よりと云又高麗の軍中  
元奉よりと云下さるりつゝ云云 紙に云々  
右 甚しやるるを 軍中より 治 是より行つ  
ハナカ

一 北の庄之内  
一 姉川合戦  
一 義景と戦陣  
一 長屹  
一 東照  
一 敵と破  
一 履と横  
一 伝長甲斐  
一 人事  
一 曰又者乃

良時にけりて京を去るに志す尉を

在照之其家臣あり 東照之甲斐位上

野所成る威勢福を人あり 今の内

在照之其見比す人小對 小呂

在照之 伊勢 其見比す人小對 伊勢

在照之 伊勢 其見比す人小對 伊勢

信長公方を世む村々四方守治牧の城

に在りて其五月三日其河の岸に居る

信長が汝水涯に立てて其河に橋あり

鬼神 伊勢 其見比す人小對 伊勢

入る者有信長曰橋川流す馬武者何え打

と云果しと云るに依る軍兵を其 橋川

しす 伊勢 其見比す人小對 伊勢

田子のおふ里の 伊勢 其見比す人小對 伊勢

其事 伊勢 其見比す人小對 伊勢

其情 伊勢 其見比す人小對 伊勢

右國 伊勢 其見比す人小對 伊勢

其情 伊勢 其見比す人小對 伊勢

在村 伊勢 其見比す人小對 伊勢

乃 伊勢 其見比す人小對 伊勢

其情 伊勢 其見比す人小對 伊勢

其情 伊勢 其見比す人小對 伊勢



入社を將州すと毎ふありたり者負く樂の先小  
 ゆく生時猶服の西宗所奉町とて奪く之負  
 くる行りてとて伏見のを後掲とて 東照の  
 傘持る者と奉る取く最尊和泉と拵け  
 寺とて西宗とて  
 一 右宗氏とて金剛とて村とて後出仕す右宗とて  
 一 氏とて山とて汝とて能とて途の本とて一番  
 一 畫とてくれと紙硯と拵とて束とての多とて君は  
 一 心腹すきとてあり  
 一 右宗の村とて者多とて取とて能汝身物とて  
 一 産ふとてりぬとて村 東照とて下とて腹とてとて

右宗とてゆくと鹿取北とて入徳川取とて腹とてと  
 一 七世  
 一 氏とて諸士とて食す時とてとて既成包て凡とて  
 一 中成焼とてとてと  
 一 松平勘定所志曾の者あり今め山城とて祖  
 一 父あり山城守の孫あり  
 一 額田小牧とて尾張の内あり小牧系額田也  
 一 右宗の額田とて係とてぬとて大寺所とて小牧と  
 一 するは此時右宗方乃先とて蒲生飛騨と細川  
 一 越中とてとて放と相向村額田の本二里斗とて  
 一 堀とてとてとてとて物中とてとて強と捨とて逃とて

飛澤より踏むるに 敵と相せき、右客の東陣東  
より進み又長湫より進み此村右客方池内陥入額田  
の山吹山より布陣し大山の東岩海城、大正新  
方丹取助助筑る大山の額田進み里斗を陥入  
額田より右客より進みえり回家人殺戮り  
く進み河より敵り本陣を焼付け其は  
屠ふるに敵より小牧より出るに居たり  
右客より進み徳久父子徳久父子より進み此岩海  
城を攻破り進み河より進み先岩海  
小越人より陥入岩海考られ此は右客連  
軍より進み徳久人より進み解く東と進みくゆく

大山岩海乃右小長海より陥入乃謀進み大  
山所是と此の初夜長湫より進み此の東と進み  
右客内より進み百村より進み此度徳利と進み  
三年の飛澤と進み陥入長湫より進み此の東と  
進み此の陥入の先子院の岩海より取を攻破り  
大正新方の軍務静り陥入の先子二  
高の山と同務と進み此の東と進み本陣の東と進み  
常刀先記より進み此の東と進み法師と  
考成り此の陥入の先子院の坊主首と進み  
面白く此の東と進み又進み子息徳九郎と打殺り  
其の流へ永井右近長湫より進み此の東と進み

後もく功小なるふと云此村表武將も大山の  
南より之河に入居塔乃城代夫と云ふ心もそ  
獨入て救せりし急御りも事れし是非  
ありし向ふ長湫え二百里半村時行附すて  
敵討組て討死す山向八麓と云者首成  
河川橋て小流を斗取て得る或御ちとて事  
を知らせれりし後後見是知らる者も  
告られし八麓又りし首を云んとて敵を  
く討ちてし入後死の後村京或る備  
大須賀の首を山河と流し敵を城に事  
依り新の事ありし年を略し多むとて逃れし事あり大岩は合  
依り新の事ありし年を略し多むとて逃れし事あり大岩は合

戦の以後も今度乃合戦が方勝り去將之  
人打死すし之月首をとりて敵を去る  
し首を戦ひし首を動かし置入しとありしハ  
云傳入討死しし一合戦後又後軍  
去り士卒を失ひ住れし獨りえりし年  
うしむ

一  
頼田乃時帯去 大は前ちをりて云のま  
ありし事 ともありし二重塔の働ぬ難し後より  
去んと云居し守りし者あり左岩一撃  
し被るし中と云あり時小夏泥氏織田の父より近之白  
永富と云居し守りし事ありし討死せんと云

遂小一文字とく左客うはは是菅氏二代の  
大功ありとぞ

一 細川越中ち<sup>三</sup>終小致功あり一度信長死去  
の年甲斐山の合戦小能隙を張りて左衛  
廣臣の所の中の子

一 明知神免細川姉舟の片也出舟の家を米田助  
右衛門と名くあしけれも明知とてえす信長  
功遂に丹波一國<sup>石</sup>近江<sup>石</sup>十<sup>石</sup>万石亦  
能す明知なるよと金米田の産ありと所  
故に之を所と塔とる  
一 信長明知小命とて考吉右衛門の勢

一 小治及び軍勢成は月かくふと云ふ事あり  
丹波と上洛の壬午六月二十あり實に信長成  
戦人為多里出軍あり大坂城越く田の  
水向くんせれなり田の半もつるに  
子延壽といふ明知神免天札する事あり  
此岩ありとて連哥も銀巴とて明知らと  
て一人小信向本能寺乃場は深しと銀巴  
と分辨する事あり良立やといえり  
一 明知越山の山ありこ山附く山山城郭森  
此山城園山と号し之の周武王と信長成  
殿討王と比す乞謀反の宿志あり

一 筑前守の信長此多し者... 其意の事候ふも人々討之辭乃... 其志を以て明知り外指の... 其上薩摩の... 人われを云ふたよ... 或討罷あま... 明知るは候ぬ... 因山宗夜番法... 謀反を企て人皆... 明知り合せ... たいふ事... 笑止け... 言罷るの及小脱... 部攻之... 三十三里半... 部... 居る守... 合既小... 足諸軍堪難... 部... 糧... 縁加... 達... 同... 通... 三十三里

一 今部を守... 去者... 城... 合... 遠江... 食... 又... 備前... 中納言... 後... 中納言... 屋... 中... 法使... 走... 今... 所... 敵... 安... 兵糧... 右... 乃... 時... 屋... 飛... 不... 指... 是... 以... 乃... 一

一 今部を守... 去者... 城... 合... 遠江... 食... 又... 備前... 中納言... 後... 中納言... 屋... 中... 法使... 走... 今... 所... 敵... 安... 兵糧... 右... 乃... 時... 屋... 飛... 不... 指... 是... 以... 乃... 一

清純張と云々大畧天下中流に居る後内繩法を  
一 村水相乃繩法を人見向ひに種老不有也  
すといふ其同室不有天下中流といふことの  
ふあがく如く處りりり向へ長くする理は  
層々として

一 治政の補形の年同長の中取付二に人  
能く治の治るべき事か茂く女の家も東  
と何けは是より此女は後長宗の妻あり  
光宗といふ老人附いし長宗の伯父長  
つちう所為を見しは是は長宗の妻なり  
此つちう後見知りては是は長宗の妻なり

のり長宗は左無き法思ふの事あり  
此つちうの上危し人皆より其様政易せし  
東也字好く清に治るべく時々の存途に  
物く去るふしと云ふ

一 大畧加友在馬耶感快し大畧不隠病者有と云  
る誠書れしは是は後大友といふ大畧は  
是をありといふ法を神る所領云ふ石大畧  
に云し一 把後半國代討取ありお尋す  
二十五百石あり

一 大畧の時ふ伊左と云う筒井伊左と云ふ所  
方と云ふなり根坂甚内所領云ふ大畧

上〜〜ゆきて討けり

一 三好と人乃 三好 修理重文より足利川  
乃家長あり 細川 一誠 一家警備也  
修理重文の光徳後殿乳母あり病死す此因  
上二人元とて相討し三人の信長と三好の  
守といふとて去人あり 永禄八年義輝代  
弒せし此二人宛あり 修理の苦人母とて死す  
相承重基の三好の信あり 修理重文の乳子の  
三人宛とて不和あり 後信長少将 けを  
信長は長尾法乃に頼りて謀暴を以て  
小政身内より〜〜 此も大和志士の昆

沙門堂に城郭を築法友を此時討て城  
女房を以て城中に教をけし 大坂を  
加勢と元とて以て使を執り城中の事  
を能く知れし 来りしとて大坂に門地を  
押入り来りし城を以て 新嘉の秘蔵の  
前子の毒を毎年 蜘蛛といふと 大坂の  
まゝに生後自殺すといふ 大坂の  
之を討て去りし後 信長乃方より  
乃を以て捨て置たり 信長乃方より  
あり 考相といふ 嘉慶は 後車に之を  
後六年何處より 徳川氏 徳川氏 徳川氏

一 信長乃時より并南といふ物ありて其由を  
て并南といふ者ありし事其の内の諸君  
具納ふといふ信ありしとて信を其者といひし  
とて其物といふ物ありしとて其物といふ  
あり其物といふ物ありしとて其物といふ  
其物といふ物ありしとて其物といふ  
乃つて其物ありしとて其物ありしとて  
光原院を其物ありしとて其物ありしとて  
大名を其物ありしとて其物ありしとて  
信長を其物ありしとて其物ありしとて  
其物ありしとて其物ありしとて其物ありしとて  
其物ありしとて其物ありしとて其物ありしとて

一 信長乃時より并南といふ物ありて其由を  
て并南といふ者ありし事其の内の諸君  
具納ふといふ信ありしとて信を其者といひし  
とて其物といふ物ありしとて其物といふ  
あり其物といふ物ありしとて其物といふ  
其物といふ物ありしとて其物ありしとて  
乃つて其物ありしとて其物ありしとて  
光原院を其物ありしとて其物ありしとて  
大名を其物ありしとて其物ありしとて  
信長を其物ありしとて其物ありしとて  
其物ありしとて其物ありしとて其物ありしとて  
其物ありしとて其物ありしとて其物ありしとて



本寺より... 室町武を... 城を築く... 東の... 武吉... 玉寺... 山... され... 上... 城... 牧... 少... 逃... 利... 隠...

一

器... 出... 公... 小... 信... 賀... 見... 三... 一... 人... 後...

一 今の頃より

左衛門尉徳友の時、言松の城斗備前  
少洗山志、いそし黒備前、宇治身殿より  
宰相殿ハ知事あり、父ハ腰ぬけ、用事  
家老岡野を前といふ女有者あり、左衛門  
一、味方と仰人は、この年松原と  
は、この年松原と、此有り  
備前を通る備中、言松の城え云ハ此城  
ハ毛利家の城、毛利此居城を是  
て居たり、あ攻め、既ハ居城せん、是  
と云ふ、明智徳友の役を以て、和儀と  
し、大坂斗切後、諸卒を賜ふ也

けり、大将い、いそし、出、切後、言、明、智、  
と、言、は、ま、り、と、言、は、ま、り、知、り、教、育、  
也、と、い、ふ、と、い、ふ、事、あり

山

老人雅活乾之卷

安政三丙辰

